

環境教育活動への協力等

赤谷プロジェクトでは「生物多様性の復元」、「持続的な地域社会づくり」に取り組んでいます。この二大目標を推進するためには、プロジェクトの理解者及び協力者を増やしていくことが必要です。そのための一つの方法として、赤谷センターでは環境教育活動への協力を積極的に行っており、赤谷プロジェクトの特徴を生かした環境教育プログラムの充実を図っています。

赤谷プロジェクトの特徴を生かした環境教育プログラムとは、プロジェクトの調査活動で得られた情報が環境教育の教材として提供され、また、環境教育で得られた情報はプロジェクト調査活動に提供される、フィードバック関係にある参加型のリアルタイムな環境教育プログラムです。

1 要望に応じたプログラムの作成

平成24年度の赤谷センターでは、センター発足当初から培ってきた独自のプログラムに加え、参加者のニーズを収集しながら、「より安全に！より楽しく！より学べる！」提案型のプログラム作りに取り組みました。

(1) プログラム提供の流れ

- 依頼者から要請（自然体験活動協力依頼書）
- 依頼者からニーズを把握
- 提案する企画の作成 依頼者と内容の確認（安全に関する事項含む）
- 事前調査（危険等の予測・緊急時・雨天時の確認・役割分担）
- 楽しみとしてのサプライズメニューの検討！
- 当日の天候を予測し実施
- 報告書の作成（失敗したこと・こうすればもっと良かったことなどは必ず記載）
- ホームページへ掲載及び活動集計表へ記載

(2) 提案した主なプログラム

プログラム名	目的	対象
・森の探検ウォークラリー ・自然観察オリエンテーリング	・森林と人間生活の関わりについて学ぶ ・森林に住んでいる生きものについて学ぶ ・植物の種子の運ばれ方について学ぶ	小学高学年
・生態系サービス(自然の恵み)を探そう！ ・森の贈り物ってどんなもの？	・生態系サービスとはどんなこと ・自然観察を通して生態系から得ている利益について学ぶ！ ・野生動物のモニタリング調査を体験する ・種子の生存戦略と進化の工夫について学ぶ ・生物多様性を保全する意義を考えよう	中学生
赤谷の森における生物多様性の復元と地域振興への取組	・赤谷プロジェクトの概要 地域づくりWGの取組について ・旧三国街道での自然・歴史探索 ・生物多様性と地域振興について(意見交換等)	大学生
赤谷の森における生物多様性の復元に向けた調査・研究の体験及び見学	・赤谷プロジェクトの概要 ・溪流の連続性の復元及び人工林から自然林への復元 ・野生生物のモニタリング調査活動 ・生物多様性と環境教育(意見交換等)	小・中・高・中等・特の教職員

2 環境教育等の実施状況

平成24年度は、14回延べ438人に対して外部から依頼を受け環境教育等（イベント的に実施したものは除く）を実施しました。

環境教育（小中学生及び親子体験含む）

年月日	名称	内容	開催地	主催者	参加人数
平成24年6月2日	高原千葉村 草野中学校体験学習	森の贈り物ってどんなもの？	みなかみ町高原千葉村	高原千葉村	10
平成24年7月23日	新治小学校サマースクール	自然観察オリエンテーリング	みなかみ町高原千葉村	新治小学校	55
平成24年8月22日	夏休み親子ふるさと体験	水生生物観察会	みなかみ町相模猿ヶ京アカデミー外	利根川水系上下流交流事業実行委員会	78
平成24年9月25日	新治小学校遠足	旧三国街道ハイキング	みなかみ町 旧三国街道	新治小学校	65
平成24年10月4日	沼田北小学校森林環境学習	森の探検ウォークラリー	みなかみ町高原千葉村	沼田北小学校	50
平成24年11月15日	高原千葉村 大椎中学校体験学習	生態系サービス(自然の恵み)を探そう！	みなかみ町高原千葉村	高原千葉村	28
平成24年12月4日	新治小学校遠足事後学習	旧三国街道遠足 事後学習(センサーカメラの設置結果等)	新治小学校	新治小学校	65
				計	351

「自然観察オリエンテーリング」(みなかみ町立新治小学校)

平成24年7月23日、群馬県みなかみ町「高原千葉村」において、新治小学校5年生50名を対象に赤谷プロジェクト協定三者が協力して「自然観察オリエンテーリング」を実施しました。このプログラムでは、生徒が5班に分かれて5つのポイント（森の贈り物 植物の発芽等 アリジゴク 森に生きる動物 森の分解者）を順番に回りながら自然のしくみについて学習します。5人の解説者からそれぞれのテーマで個性を活かしたインタープリテーションを聞けるのが特徴です



1班 森の贈り物



2班 植物の発芽等



3班 アリジゴク



5班 森の分解者



4班 森に生きる動物

「生態系サービス（自然の恵み）を探そう！」（千葉市立大椎中学校）

平成24年11月15日、群馬県みなかみ町「高原千葉村」において、大椎中学校2年生26名を対象に「生態系サービスを探そう！」を実施しました。このプログラムでは、「生態系サービス・探索シート」を活用し、観察中に見つけた自然の恵みを書き込み、それがどんなことに役にたっているのかを考えながら、生物多様性とは何か自ら実感できるプログラムとなっています。また、観察中は、楽しみながら様々な疑似体験もできるようになっています。



ターゲットアニマル



リス発見！



隠れミッキー発見！

生態系サービス・探索シート

平成 年 月 日 () 中学校 年 級 名前 _____

チェックポイント1「スギ・カラマツ林」

人間が育てた森から学んだ、生態系サービスにはどんなものがありましたか？
例…木材

チェックポイント2「里山の広葉樹林」

里山の広葉樹林で見つけた生態系サービスはどんなものがありましたか？
例…キノコ

チェックポイント2「ターゲットアニマル（フィールドスコープ）」

どんな動物を見つけましたか？
1. ムササビ 2. カモシカ 3. タヌキ 4. 隠れミッキー
5. ウサギ 6. サル 7. リス 8. テン 9. アナグマ
10. OO先生

生態系サービス・探索シート



探索シートに記入しています。

セミナー・研修等（大学生及び社会人）

年月日	名称	内容	開催地	主催者	参加人数
平成24年5月14日	平成24年度 森林生態系スペシャリスト養成研修	赤谷プロジェクトの取組を例にし、赤谷の森内において、森林生態系の知見を有する職員の養成等を目的。5/14～18日(5日間)	いきもの村外	関東森林管理局	8
平成24年5月26日	放送大学面接授業	赤谷プロジェクトの内容とその意義(廣橋所長講義)	沼田市立図書館	放送大学群馬学習センター	9
平成24年7月26日	平成24年度 群馬総合教育センター研修講座	環境教育研修講座「自然観察や教材製作、施設見学などを通して、児童生徒に実体験を伴った環境教育を実践するための指導力の向上を図る」ことを目的。	いきもの村外	平成24年度群馬県総合教育センター	15
平成24年9月5日	高崎経済大学ゼミナール	観光政策研究に関わるゼミナール活動	いきもの村 旧三国街道	高崎経済大学	11
平成24年10月17日	平成24年度 生物多様性保全研修	赤谷森林環境保全ふれあいセンターの取組(現地実習・講義)の講師依頼。(参考:10/15～19日)赤せ担当:10/17	茂倉沢2号ダム外	森林技術総合研修所	18
平成24年11月14日	環境省自然保護官等研修	赤谷プロジェクトの概要説明。地域におけるコーディネート事例(廣橋所長講義)	環境省環境調査研修所	赤谷ふれあいセンター	21
平成24年11月27日	平成24年度(国別研修)ブラジル生物多様性保全研修(JICA)	赤谷プロジェクトの現状と課題～国有林における生物多様性の取組～	いきもの村 たくみの里 南ヶ谷湿地	国際協力機構東京国際センター	5
				計	87

赤谷プロジェクトは、生物多様性の復元に関する先進的な取り組みであるとともに、国有林の協働管理のモデルでもあります。赤谷プロジェクトのこれまでの成果、協働管理のためノウハウ等について、他の国有林をはじめとする国内外の森林の管理に広く役立ててもらうため、林野庁等の行う研修や大学生・社会人向けのセミナーにも積極的に協力することとしています。

「平成24年度群馬県総合教育センター研修講座」(群馬県内の教員対象)

平成24年7月26日、群馬県みなかみ町「いきもの村等」において、群馬県内の小中高等教員15名を対象に「自然観察や教材製作、施設見学などを通して、児童生徒に実体験を伴った環境教育を実践するための指導力の向上を図る」ことを目的とした



センサーカメラの説明

研修講座(群馬県総合教育センター主催)が赤谷プロジェクトを題材に実施されました。

研修では、溪流の連続性の復元及び人工林から自然林への復元、野生生物のモニタリング調査活動を体験するとともに、生物多様性と環境教育等についても当センター職員と意見交換も行いました。



オリエンテーリング

「高崎経済大学ゼミナール」(高崎経済大学3年生)

平成24年9月5日、群馬県みなかみ町「いきもの村等」において、高崎経済大学地域政策学部観光振興学科の3年生10名を対象にセミナーを実施しました。「観光政策研究に関わるゼミナール活動」講座のメニューとして、赤谷プロジェクトの概要、地域づくり等への取組、旧三国街道での自然・歴史探索など要望に沿ったプログラムを作成しました。



自然観察等の様子

現地では、実際に旧三国街道を歩き、歴史と自然にふれながら、赤谷プロジェクトで行っている「旧三国街道MAPづくり」体験等を体験していただきました。



赤谷プロジェクトの取組

「平成24年度 生物多様性保全研修」(林野庁及び都道府県職員)

平成24年10月17日、群馬県みなかみ町「いきもの村」等において、林野庁森林技術総合研修所からの依頼により、林野庁及び都道府県職員18名を受け入れました。この研修は「生物多様性の保全を踏まえた森林計画の作成や森林施業を推進するため、生物多様性保全に配慮した森林の管理・経営の知識や技術、関係機関との連携調整手法を習得」等を目的に行われています。



赤谷プロジェクトの概要説明



自然林復元試験地

赤谷センターでは、赤谷プロジェクトの概要と自然林復元試験地での取り組みとその目的・各WGの位置づけや活動の紹介に加えて、協働管理を円滑に行っていくために工夫した仕組み作りなどを説明しました。

「環境省自然保護官研修」(環境省職員)

平成24年度11月14日、埼玉県所沢市の環境省環境調査研修所において、環境調査研修所の依頼により、赤谷プロジェクトの概要等について説明しました。この研修は、環境省が自然保護官事務所勤務を経験した職員21名を対象に「様々な分野の有識者や他の研修生との意見交換を通して、視野を広げること」等目的に実施しています。

自然環境行政は、地域において多様な主体の参画を得て、協働して進めていくことが重要であることから、自然保護官が地域のコーディネーターとしての能力を發揮することが求められており、赤谷センターは、地域におけるコーディネートの事例の一つとして赤谷プロジェクトを紹介・説明しました。質疑等では、「サポーターを通して、国民の声を吸い上げるといふ、非常に手間のかかるこのようなプロジェクトを立ち上げた背景は何か」、「限られたマンパワーの中で、どうやってこのプロジェクトを回しているのか」など、普段とは異なり、赤谷プロジェクトの仕組みや実際の運営方法についての質問が多かったです。



環境省環境調査研修所

「生物多様性保全」(JICA国別研修ブラジル)

平成24年11月27日、群馬県みなかみ町「いきもの村等」において、独立行政法人国際協力機構(通称:JICA)東京国際センターからの依頼により、ブラジルの環境省の担当官1名と現場で生態系の保全・管理に取り組んでいる事務所の所長をされている方2名の計3名の研修生を受入れ、赤谷プロジェクトの生物多様性保全に関する取組を説明しました。

国際協力機構では、我が国政府の技術協力計画に基づき、開発途上国の経済・社会開発に必要な人材を養成する一環として研修生受け入れ事業を行っています。

赤谷センターからは、赤谷プロジェクトは発足9年目で、ようやく各種工事等との調整のルール化ができつつあること、このような取り組みを進めて行くには、「幅広い層への環境教育」や「科学的な根拠に基づいた情報提供」等が重要と考えている等の説明をしました。

研修生からは、本国では国民の教育水準も様々で、環境教育に取り組むのはまだまだ難しいが、保護区の利用を規制するだけではなく、情報提供等にも力を入れていきたいとのコメントをいただきました。



ポルトガル語の通訳を交えた説明



ポルトガル語のメモ



スギ列状間伐林の説明



研修終了後の様子

3 赤谷の森自然散策

群馬県内の一般の方々等を対象に、赤谷の森の生物多様性のしくみ、森林の働き、動植物についてなど自然や環境のことを学べる環境教育プログラム「赤谷の森自然散策」を開催しました。

これは、赤谷センターの主催で、平成18年度から継続して実施しています。

平成24年度の実績

実施回数：3回

参加者数：延べ41名/延べ募集定員数70名

(1) 平成24年5月27日 (日曜日) 春の小出俣林道散策コース

実施場所：群馬県みなかみ町小出俣林道

参加者数：7名

ガイド：長浜陽介 (赤谷プロジェクト地域協議会)

実施内容：春の新緑の芽吹きや春の花、小動物等の食べあとを探しながらアップダウンの少ないなだらかな道を、専門のガイドにより約4時間 (約6km：高低差300m程度) 自然とのふれあいを提供しました。



ガイドさんの解説



大カツラの前で記念撮影

(2) 平成24年10月28日 (日曜日) 錦秋の小出俣林道散策コース

実施場所：群馬県みなかみ町小出俣林道

参加者数：17名

ガイド：長浜陽介 (赤谷プロジェクト地域協議会)

実施内容：錦秋に染まった山々の紅葉。そして、冬支度する小動物等の痕跡などを探します。

アップダウンの少ないなだらかな落ち葉の絨毯を踏みしめて、専門のガイドにより約4時間 (約6km：高低差300m程度) 自然とのふれあいを提供しました。



ガイドさんの解説



自然林復元試験地で記念撮影

(3) 平成25年2月17日 (日曜日) 冬芽の観察とアニマルトラッキング

実施場所：群馬県みなかみ町相俣いきもの村外

参加者数：17名

ガイド：長島成和 (赤谷プロジェクト植生管理WG委員)

実施内容：森林土壌の一人者である長島成和氏の (約30年間、森林土壌の専門家として活躍) 指導のもと、数十種類の樹木の冬芽をルーペで見たり、カッターで切ったり、匂いを嗅いだりしながらその特徴をつかみ、落葉期の樹木の見分けたを学びました。講義の後は、いきもの村周辺にて、スノーシューを履き歩きながら雪上でのアニマルトラッキング & 冬芽の観察を行いました。



冬芽の講義



いきもの村で記念撮影

地域との連携

赤谷センターでは、赤谷プロジェクトの目標である、「持続的な地域づくり」を目指し、地方自治体、教育関係機関や地元NPO団体等と協力・連携関係を構築するための様々な取組を実施しています。

1 地域行事等への参加・協力

平成24年度は、利根沼田地域のイベント等に地域協議会等とともに積極的に参加しました。

「夏休みふるさと体験」(群馬県みなかみ町相俣)

平成24年8月22日、川古温泉周辺の広河原にて、県内外から約80人の親子が参加して、利根川水系上下流交流事業実行委員会主催による夏休み親子ふるさと体験が開催されました。赤谷センターでは、利根沼田森林管理署と協力し水生生物の観察会の運営等を担当しました。

利根川上流にある群馬県と、多くの水を利用している東京都は、人々の交流を通じて、「水の大切さ」及び「水の育む森林の大切さ」について意識を高め、相互の理解を深めることを目的に、利根川水系上下流交流事業実行委員会を設立し、小学生と保護者による相互訪問などの交流事業や水に関する啓発事業を行っています。



水生生物観察の説明



ヘビトンボ



観察の様子

「猿ヶ京赤谷湖上花火大会」(群馬県みなかみ町猿ヶ京温泉)

平成24年8月25日、みなかみ町猿ヶ京温泉にて、猿ヶ京温泉まつり実行委員会主催の花火大会が開催されました。(来場者数：約13,000人)当日のメイン会場(まんてん星の湯駐車場)では、赤谷プロジェクト地域協議会がブースを設置し、赤谷プロジェクトの紹介を行いました。



地域協議会ブース

赤谷プロジェクトの紹介を行いました。赤谷センターでは、このブースのレイアウト等に協力しました。



赤谷プロジェクトのPR

「北毛発！100のしあわせプロジェクト」(群馬県昭和村)

平成25年2月2～3日昭和村公民館において、「北毛発！100のしあわせプロジェクト」実行委員会主催のイベントに赤谷プロジェクトのPRと赤谷センターを沼田市周辺の皆さんに知っていただくために参加しました。イベントでは、当センターで初めてとなる、ヒノキの球果を使用したストラップ作り等のネイチャークラフト体験を行いました。体験者は、2日間で55名(推定ブース来訪者数約100名)

「北毛発！100のしあわせプロジェクト」とは、個性豊かなイベントや多彩な内容のメインイベント、北毛地域のあちこちで生まれる参加型の“コラボ企画”・・・を織り交ぜながら、それらが100の笑顔・100のしあわせに繋がっていったら・・・ というものです。主催：群馬県/利根沼田地域ボランティアセンター北毛発！100のしあわせプロジェクト」実行委員会(群馬県「平成24年度NPO等活動支援事業」内閣府「新しい公共」事業)



イベントのチラシ



ネイチャークラフト体験



ヒノキ球果とビーズ等が材料



完成したストラップ

みなかみ町新治地区の主な地域行事への参加

4月12日	赤谷集落等の十二様祭	所長
	永井十二神社獅子舞	所長
4月14日	猿ヶ京明神社太々神楽	1名
5月6日	猿ヶ京温泉菜の花まつり	1名
6月3日	平標山山開き	1名
8月25日	赤谷湖上花火大会	2名

2 地域の取り組みへの支援

赤谷センターでは、ふれあい業務を通じて、地域のNPO等への支援を行っています。

「環境教育アイテムを活用した地域振興」への寄与

みなかみ町廃校活用プロジェクトを行っている「一般社団法人猿ヶ京小学校スポーツアカデミー」と協力して、環境教育用アイテムとして活用できる「空飛ぶタネの模型（名称：ロケットリーフ）」を作成しました。

現在、赤谷センターの環境教育及びイベントのアイテムとして活用しつつ、新たなプログラム作りも支援しています。

ロケットリーフは、スギ・ヒノキ等の群馬県産間伐材を使用していることから、現在、間伐材製品の認定を申請中。認定後は、県産材・間伐材の普及アイテムとして活用する予定です。加えて、袋詰め作業を障害者団体へ発注、売り上げの一部を緑の募金に寄付していることから、地域振興アイテムとしての活用も期待できます。



普及用のチラシ

3 赤谷プロジェクトの活動規模

赤谷プロジェクトが調査活動や視察・イベントなどを通じて、プロジェクトエリア周辺地域の振興にどの程度貢献しているのかの目安として、おおよその延べ人数を算出しました。

- (1) 環境教育・イベント等 約2,000人
- (2) 調査活動等 約900人
- (3) 会議・検討会等 約500人

平成24年度の赤谷プロジェクトの活動規模は、延べ人工として、約3,400人規模の活動でした。また、赤谷プロジェクトを運営する国側の出先機関として、沼田市に関東森林管理局赤谷森林環境保全ふれあいセンターを設置し、常勤職員3名、臨時職員1名、計4名の配置を行っています。

規模人工調査は、赤谷センターが、各イベント・視察・環境教育・赤谷の日等からカウントしているデータを基に算出しました。

モニタリングに調査等に関しては、調査請負者への聞き取りや個別の調査日数に平均的な一日当たりの調査人数を掛けて算出しました。

会議等については、出席者数を会議ごとに算出しました。会議は、赤谷プロジェクト関係する会議（東京で開催された会議も含む）をカウントし、

集計は、十の位を四捨五入し、百人単位としました。

4 綾プロジェクトとの交流

赤谷プロジェクトには「綾プロジェクト」という姉妹プロジェクトがあります。平成16年に赤谷プロジェクトが始まったその一年後に、九州の宮崎県で「綾の森照葉樹林プロジェクト(正式名称：綾川流域照葉樹林帯保護・復元計画)」が立ち上がりました。しかしながら、この2つのプロジェクトは今までほとんど交流がありませんでした。

平成24年12月19～20日にかけて、ユネスコ・エコ・パークの認定を検討しているみなかみ町が中心となり、「綾プロジェクト」の視察が行われました。

みなかみ町からの参加者(町議会議員、役場職員等計9名)に加え、赤谷センターをはじめとする赤谷プロジェクト関係団体からは、それぞれの調査目的を持った5名が参加し、綾プロジェクトの取組を学ぶことができました。

赤谷センターの綾プロジェクト調査の目的

「綾川流域照葉樹林帯保護・復元計画(通称：綾プロジェクト)」5者協定による運営方法等の調査

綾プロジェクトは、赤谷プロジェクトの翌年に発足した「モデルプロジェクト」であり、宮崎県中央部に位置する原生的な照葉樹林を保護し、二次林や人工林をかつての林相である照葉樹林に復元することを目的としている。そのため、取組内容や運営上の課題等について、多くの類似するものがあると考えられる。

赤谷プロジェクトでは、「生物多様性の復元」と「持続的な地域づくり」を目指し取組んでいるが、持続的な地域づくりの取組はあまり進んでいないのが現状である。

今後の赤谷プロジェクトにおける地域づくりの取り組みの参考とするため、プロジェクトを核とした地域づくりの先進事例である5者協定による綾プロジェクトにおける地方公共団体及び観光協会等の関わり方、森林の利用と保護の両立のあり方について、現地調査及び関係者との意見交換を行う。

綾町役場では、綾町の照葉樹林、地域振興、有機農業への取り組みや自然との共生といったテーマのPRビデオを視聴後、企画財政課担当者から、綾町の照葉樹林や有機農業の推進、ユネスコ・エコ・パーク登録、その後の取組などの説明を受けました。

登録後のメリットとしては、綾町の知名度の向上、外部から講演等の以来の増加等がありますが、それに伴い運営体制の強化が必要となっているそうです。



12/20照葉大吊橋



12/19綾町役場での意見交換

当初、住民からは「私たちは何をしたらいいのか?」といった質問があったが、新聞等に連日報道されるうちに、プロジェクトへの住民の関心が高まり、街並みを大切に思う意識が芽生え綾プロジェクト地域づくりWGの活動も活発になりました。他にも様々な視点で意見交換を行いました。

業務研究発表会への取組

平成16年度から始まった、赤谷プロジェクトエリアは、研究者や大学生の研究フィールドとして、広く利用されています。

研究対象は、多種多様で、動植物などの自然科学のほか、地域社会と自然の関わりなどの社会科学系の研究等、様々な視点で調査・研究活動が行われています。赤谷センターも、赤谷プロジェクト関係者と協力し、業務研究発表に参加しています。

1 赤谷センターにおける業務研究発表会への参加

年度	場所	課題	備考
H18	林野庁	赤谷プロジェクトにおける環境教育について 発表者：赤セ：小川純、NJ：茅野恒秀、地協：林 泉	全国森林レクリエーション協会会長賞
H18	関東局	赤谷プロジェクトにおける猛禽類モニタリング～赤谷の森における協働調査の実施と成果報告～ 発表者：赤セ：山本道裕、NJ：出島誠一、地協：松井睦子	
H22	関東局	「赤谷プロジェクト発足8年目を迎えるに当たって～赤谷の森管理経営計画書の策定～」 発表者：藤代和成	

H18年度に局の推薦枠の中で、林野庁での発表と同じ年度に局での発表を行っていました。その後は、H22年度に参加しています。

2 平成24年度関東森林管理局業務・林業技術発表会へ参加

平成25年2月26日～27日、平成24年度関東森林管理局業務林業技術発表会が、前橋テルサ（群馬県前橋市千代田町2-5-1）にて開催され、国有林民有林あわせて26課題が2日間にわたり発表されました。

当センターからは、「赤谷プロジェクトって！知っていますか？」～赤谷プロジェクトを効果的にPRするため広報戦略を作成しました～と題して広報活動の取組を発表しました。

発表は、赤谷森林環境保全ふれあいセンターにおける、今までの広報活動の問題点を洗い出し効果的なPR活動を行うために「赤谷森林環境保全ふれあいセンターにおける赤谷プロジェクト広報戦略企画書」を作成したことと、その取組みの中間成果を発表しました。



栗田自然再生指導官の発表

広報活動

1 赤谷センターにおける赤谷プロジェクト広報戦略の推進

赤谷プロジェクトの普段の活動は、基礎情報としての自然環境等のモニタリングや「生物多様性の復元」を目的として行った試験的な取組みに対する動植物等の反応の把握などの地道な作業が大半です。

このような地道で長い年月に渡る取組みは、国民の皆様からの支援なしでは成り立ちません。そのため赤谷プロジェクトの取組みを知っていただくために、今までの広報活動の問題点を洗い出し効果的なPR活動を行うために「赤谷センターにおける赤谷プロジェクト広報戦略企画書」を作成し、広報活動に積極的に取り組みました。

(1) 赤谷センターにおける赤谷プロジェクト広報戦略の特徴

- ・ 赤谷森林環境保全ふれあいセンター単独でも実施可能なこと
- ・ 月別取組目標を設定していること
- ・ 年間の実施スケジュールを設定していること
- ・ 実施にあたって、関連予算を確保していること
- ・ 毎年、必要に応じて見直しを行うこと
- ・ 赤谷森林環境保全ふれあいセンター内に担当スタッフを配置していること
- ・ 通常の業務とリンクしながら、進めて行けること

(2) 広報関連グッズの作成(のぼり旗、横断幕、ポスター等)

職員自らが、デザインした、のぼり旗・ポスター等を作成し、様々な場面で活用しました。



様々なデザインのパスター



横断幕とのぼり旗

2 広報戦略7つのポイントの推進

(1) 地域の核となる情報発信基地を設置

赤谷プロジェクト地域協議会や協力関係を築いている地元公益団体等の支援を受け、「道の駅：たくみの里」(来訪者約45万人)及び「上毛高原駅(利根沼田広域観光センター)」等に広報スペースを確保し、運営・情報発信を積極的に行いました。

(2)「赤谷の森だより」をより効果的に配布(12,000部)

配布先を見直し、新規に教育関係機関やNPO及び管内職員へ向けて、各署等へ1部しか送付していなかった情報誌について、各署等の広報スペースへの設置も兼ねて送付部数を増やしました。

- ・H17年度 広報誌「赤谷プロジェクトかわら版」発刊
- ・H19年3月から「赤谷の森だより」に名称変更し、年3回発刊し、みなかみ町内全戸に配布(発行部数11,000部 H20年度より12,000部に増刷)
- ・H22年第14号より、紙面をより親しみやすい内容に刷新し、平成24年度末まで22号発刊。



情報誌の変遷

<p>赤谷の森だよりvol.22</p> <ul style="list-style-type: none"> ・赤谷の森写真館「三国山・平標山の花々」 【写真提供：林ふさ子、文：平成24年猿ヶ京温泉周辺勉強会第1回講演会より抜粋】 ・赤谷の森でわかったこと「ニホンザルを調べてみたら」 【赤谷プロジェクト地域協議会：安田剛士】 ・サポーター活動の紹介 オオムラサキの幼虫探し ・NACS-J自然観察指導員講習会in猿ヶ京 ・赤谷プロジェクトに望むこと 【新治小学校：小林友子(畏敬の念と感謝)】 	
<p>赤谷の森だよりvol.21</p> <ul style="list-style-type: none"> ・赤谷の森写真館「カブトムシ採りの思い出」 【みなかみ町役場環境課：小池俊弘】 ・赤谷の森でわかったこと「小出俣自然再生試験地」 【日本自然保護協会：藤田卓】 ・サポーター活動の紹介 ヤマビル対策 ・自然観察オリエンテーリング「新治小学校サマースクール」 ・赤谷プロジェクトに望むこと【高原千葉村：阿部政英】 	
<p>赤谷の森だよりvol.20</p> <ul style="list-style-type: none"> ・赤谷の森写真館「ハイキングコースで可憐な草花と出会う！」 【地域協議会：越尾武】 ・赤谷の森でわかったこと「赤谷の森のコウモリ」 【コウモリの会事務局：三笠暁子】 ・サポーター活動の紹介 南ヶ谷湿地 ・国連子ども環境ポスター「原画コンテスト御一行の来訪」 ・赤谷プロジェクトに望むこと【地域協議会：河合進】 	

(3) ホームページ・メールマガジンを積極的に活用

ホームページを活用し、赤谷プロジェクトの取組を楽しくユーモアを交えて紹介するブログを作成しました。また、ブログ更新回数月8回を目標にしました。さらに平成24年12月号から関東森林管理局のメールマガジンを活用し、情報を発信しました。

➢ ホームページを活用し、赤谷プロジェクトのWG会議や赤谷の自然など今まで以上に楽しい情報等を発信。**H24.4月～H25.1月末現在 更新回数111回/月平均11回**

➢ 関東森林管理局等のメールマガジンを活用する。**H24年12月12日【第37号】から配信**

平成24年度のブログのポイント

- WG会議の情報を配信
- より詳細な内容を提供
- キャラクター制の導入
- 連載形式
- 情報ソースのあるうちに配信
- 関係団体のHPとリンク

・レインマム
・葉ちゃん
・現場代理人石坂さん
・名探偵コンナン
(秋田弁バージョン)
・ヤマヒルのB川ちゃん
・お〜〜つけた！ 等

2012年9月の記事

企業運営会議(第1回)

10月24日(水曜日)18時30分から赤谷プロジェクトの中でも最も重要な会議的な決定を行っています。)である「企業運営会議」が、群馬県みなかみ町の重要な位置づけを認識しつつ、全職員(といってもお名(さん)で輸入だ

【企業運営会議とは】

「三國山地/赤谷川・生物多様性復元計画」の推進のため第五回企業運営会議

赤谷プロジェクトの具体的な活動内容は関東森林管理局、NACS及び諸般年次回復度定期的に開催するほか、必要に応じて開催する。

全文は、http://www.akaya.maff.go.jp/kanto/policy/business/akaya_pro

赤谷プロジェクト

生物多様性復元を目指して

今回は、赤で

関東森林管理局メールマガジン 関東森林管理局 2012年12月12日【第37号】

関東森林管理局メールマガジンは、広報紙「関東の森林から」の記事を中心に、国有林で行われている森林づくりに関する様々な話題や、管内各地からのお便りなどの情報を提供しております。

また、掲載いただきました皆様方からのご意見やご要望を業務の参考にしてまいりたいと考えております。

INDEX

1. 広報紙「関東の森林から」12月第105号

2. 赤谷の森だより

なかなかな雨がヤママセン!

レインマム(と)ービシービシー
どうか雨降ってくださると喜ばしい日でした。

これからもどんだん、赤谷プロジェクトの様々な取組を紹介しますので、よろしくお祈りください。赤谷プロジェクトでは、サポーター募集もしています。

http://www.nacs.jp/akaya_blog/index.html

AKAYA(赤谷)プロジェクトホームページより

(4) 業務研究発表へ毎年参加

調査・研究分野での活動がメインである赤谷プロジェクトですが、関東森林管理局業務・林業技術等発表会では8年間で2回しか参加していません。今後は、毎年テーマを定め他署等の範となるよう積極的に参加することとしました。今年度では、広報活動の取組を発表するとともに会場内にパネル等を展示しPRも行いました。(関係者を含め来場者数約200名。)



パネルの展示

(5) 局・署等が参加するイベントブースに積極的に参画

赤セ職員を派遣し、パネル・パンフ等を設置するとともにブース運営についてもアイデアを出しながら積極的に参画しました。

「21世紀の森フェスティバル」(群馬県沼田市)

平成24年8月26日群馬県立森林公園「21世紀の森」で開催されました。出展した利根沼田森林管理署のブースでは、しおりづくり等を行いました。赤谷センターでは、赤谷プロジェクトのパネルを3枚展示させていただくとともに運営にも協力させていただきました。また、秋に開催する「赤谷の森自然散策」のチラシ等の配布も行いました。

(来場者数：約5,000人)



イベントのチラシ等配布

「第36回全国育樹祭」(静岡県伊豆市)

平成24年11月10日美しく力強い森林に包まれた郷土を次代につなぐ第36回全国育樹祭記念行事に参加しました。当日は、サテライト会場「天城ドーム」木とのふれあい広場内の伊豆森林管理署ブース内において、赤谷プロジェクトの取組をパネルや種のロケットリーフ等PRしてきました。

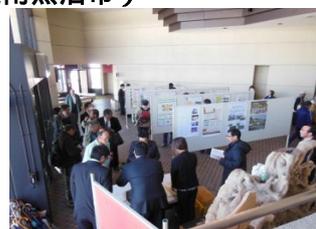
(サテライト会場来場者数：約3,000人)



ロケットリーフ等配布

「みんなの力で地域の自然力・魅力アップ・シンポジウム」(新潟県南魚沼市)

平成25年3月4日南魚沼市浦佐のコミュニティホール「さわらび」において、南魚沼地域で自然環境の保全活動や地域づくり、農林漁業等様々な立場の人々が、地域の環境や自然を利用し地域振興につなげる方法を考えようと開催されました。(主催：南魚沼地域振興局)当日は、パネル展示ブースにて、赤谷プロジェクトPR活動を行ってきました。(シンポジウム参加者数：160人)



パネルの展示ブース

(6) ふれあい業務・視察等を積極的に推進

赤谷センターの持っている環境教育プログラムを活用し教育関係機関及びNPO等に対し積極的に支援しました。また、広報活動の重要な位置付けである視察等を積極的に受け入れるためのPRにも力を入れました。

平成24年度の視察受入れ実績は、9回、延べ52名でした。

「韓国山林技術士協会視察」(平成24年10月9日)

この協会は韓国山林庁の依頼を受け「加里王(ガリワン)山遺伝資源保護区域保全・復元方法研究」を行っております。(加里王山は韓国の江原道にある森林で、2018年に開催される平昌冬季オリンピックの滑降競技場予定地となっている)この研究における海外事例調査の一環として赤谷プロジェクトを視察されました。(視察者数6名)



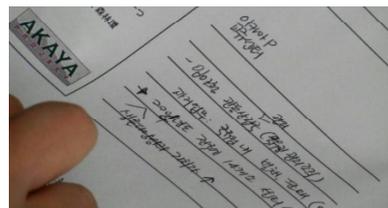
赤谷プロジェクトの説明



列状間伐に質問



小出俣自然林復元試験



視察者のメモ

「21世紀・アイヌ文化伝承の森プロジェクト推進会議作業部会視察」(平成24年11月30日)

北海道平取町等から「21世紀・アイヌ文化伝承の森プロジェクト推進会議(通称アイヌプロジェクト)」作業部会メンバーの皆さん13名が視察に来てくださいました。アイヌプロジェクトを進めるにあたり、赤谷プロジェクトを先進事例として、プロジェクトの仕組み・協定締結までの進め方・地域振興策等について、意見交換を行いました。



茂倉沢2号ダム



赤谷プロジェクトPRブースの説明

(7)「赤谷の野生生物カード」を広報手段として積極的に活用

センサーカメラ等で撮影した写真は赤谷センターの貴重な財産であり、それを有効活用した「赤谷の野生生物カード」は、様々なイベント等で配布し活用しました。現在の40種から50種に種類を増やし、カード作成に手間が掛っていた作業を見直し、量産できる方法を検討しています。



3 情報発信場所の拡大

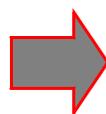
地域協議会や職員等の働きかけにより、ポスター等の掲示できる箇所が増加しました。



JR上越線 水上駅～上牧駅～後閑駅にポスターを設置



法師温泉



ロビーに設置

4 関東森林管理局広報誌「関東の森林から」への寄稿

平成24年度は、赤谷プロジェクトエリア内で行われているモニタリング活動をわかりやすく解説し、より多くの方に関心をもって頂けるように「赤谷の森のモニタリング活動」をテーマに赤谷プロジェクトに関する取組等を寄稿しました。

番号	発行月	内 容	
97号	4月	<p>「赤谷プロジェクトのモニタリング活動」 第1回（自然再生復元試験地） スギなどの人工林の一部を植栽などの方法に頼らず、自然の力を活かし自然林へと誘導するには、人工林をどのように伐採するのが効率的なのか、いくつか試験地を設けて検証しています。</p>	
100号	7月	<p>「赤谷プロジェクトのモニタリング活動」 第2回（イヌワシとクマカタ） イヌワシやクマカタが年間を通して生息し、繁殖するためには、様々な野生動物が生息していなければなりません。赤谷プロジェクトでは、この2種類の猛禽に焦点を絞ったモニタリング活動を行うことにより、赤谷の森の自然環境の状態を総合的に把握できると考えています。</p>	
103号	10月	<p>「赤谷プロジェクトのモニタリング活動」 第3回（ホンドテン） ホンドテンは、何でも食べるのが特徴で、日本に暮らすほ乳類の中でもトップクラスの雑食性を誇ります。こんなテンの食生活を調べることで、テンにとっての赤谷の森の環境やその変化を客観的に捉えることができるのではないかと考えました。</p>	
107号	1月	<p>「赤谷プロジェクトのモニタリング活動」 第4回（溪流環境復元WGの取組） 溪流の特徴の一つには、水の循環に伴う物質の移動があげられます。エリア内のどこにどのような溪流環境があるのかを把握し、それぞれの特徴を踏まえた上で、溪流ごとの環境の保全・復元のあり方を検討しています。</p>	

5 マスメディアの活用

様々なマスメディアの取材に対し情報提供に努めました。特に地元記者クラブ（刀水記者クラブ（前橋市）・沼田記者クラブ（沼田市））との密接な関係を築くため、赤谷プロジェクトの情報誌やイベント紹介など積極的な情報発信を行いました。また、群馬県の「ぐんまイメージアップ推進室」とも連携し、冊子の作成等に協力しました。

「水源の森を守る」～赤谷プロジェクトを支える人々～山と溪谷 2013.3月号

月刊誌「山と溪谷2013.3月号」に赤谷プロジェクトの記事が掲載されました。紙面では、赤谷プロジェクトの歴史やこのプロジェクトを支えている人々、そして、赤谷プロジェクトの活動などを紹介しています。



赤谷プロジェクトを支える人々 水源「赤谷の森」を守る

三國山脈西部に広がる「赤谷の森」。ここは動植物の息吹にあふれ、秘湯も湧き出た聖域だ。同時に、利根川水系のひとつであり、首都圏2700万人の家族でもある。一時はスキー場やダム開発の激波もあったが、それに抗って残された豊かな光景。その歴史と、それを支えた人びとを取材した。



紹介ページ

「ぐんまがいちばん！」群馬県企画課ぐんまイメージアップ推進室

群馬県民の皆さんに群馬県の魅力を再認識していただくとともに、県外に向けて群馬県を印象づけるため、群馬の魅力的な素材や県民にもあまり知られていないようなトピックスなどを、群馬県のマスコット「ぐんまちゃん」が紹介するというコンセプトで作成されたPR冊子に赤谷プロジェクトの記事を掲載していただきました。



表紙

「自然」 国有林を協働管理「赤谷プロジェクト」

国有林の赤谷の森では、地域住民で組織する「赤谷プロジェクト地域協議会」、林野庁関東森林管理局、日本自然保護協会の3つの中核団体が協働して、生物多様性の復元と持続的な地域づくりを進めています。国有林を協働で管理していくとするこの取り組みは日本初のもので、この「赤谷プロジェクト」では、猛禽類や植生等のモニタリング調査、人工林から自然林への復元、渓流環境の復元、環境教育活動などに取り組んでいます。



赤谷プロジェクトの紹介記事

冊子は、分野ごとに群馬が日本一、日本初のものなどを紹介し、さらにその関連情報や話題性のある事柄を写真を使いながらわかりやすく解説しています。また、各ページの最下段でも群馬のさまざまな情報をクイズ形式で紹介するなど見所満載です。群馬県ホームページから入手可能

<http://www.pref.gunma.jp/01/b0100132.html>

その他の活動

1 赤谷の日

赤谷の日とは、毎月第一土・日に実施しているサポーターとプロジェクトの関係者による共同の活動日です。赤谷の日には、プロジェクトの活動拠点である「いきもの村」に集まり、定例の調査活動等を実施しています。今年度からは、地元猿ヶ京温泉の振興に貢献するため、年4回旅館等への宿泊を行いました。



旅館等への宿泊の様子

また、赤谷の日の炭焼きを指導して下さった阿部年男さんが、旭日単光章を受章されました。阿部さんは赤谷の日



H16年当時の阿部年男さん

で「炭焼きをやろう」という話しになった時に仲間を集めてたくみ小屋で炭焼きのレクチャーをし、炭焼きの指導者として笛木さんを紹介してくれました。その後、失敗した年もありましたが、毎年冬に炭焼きを行っています。



今年の炭焼きは成功でした

シカ柵の設置（6月赤谷の日）

ニホンジカによる森林被害は近年全国的な課題となっています。幸いにも赤谷プロジェクトエリア内での被害状況は現時点ではひどいものではありませんが、それでもセンサーカメラでの撮影頻度は年々増加してきており、シカの食痕も確認されています。

そのような背景から、平成23年度に設置したスギ漸伐自然林復元試験地において、ニホンジカによる森林被害の程度を確認するために10m×10mのシカ柵を計3箇所設置することにしました。

6月の赤谷の日にはシカ柵の納入業者の方に現地に来ていただき、作業の手順や設置方法をレクチャーしていただいたあと実際の設置作業に取りかかりました。予想より細かい作業が多く、時間はかかりましたが10m×10mのシカ柵を1箇所、設置することができました。



レクチャーを受けている様子



設置できたシカ柵

人工林管理を学ぶ（9月赤谷の日）

赤谷プロジェクトの目的は生物多様性の復元と持続的な地域づくり。そのためかどうかわからず、国有林をフィールドとしているにもかかわらず、林業や森林整備に関するサポーター向けの勉強会や現地見学会は今まで実施したことがなく、間伐作業の説明をしても「よく分からない」と言われることがしばしばでした。

そのため、9月の赤谷の日には利根沼田森林管理署にお願いし、間伐の必要性とその作業の進め方等について、1日をかけてじっくりと説明していただきました。また、夕食後にも赤谷センターから日本の林業・木材産業について説明しました。内容を詰め込みすぎたかと思っただのですが、感想を聞くと「林業や木材に関する理解がずいぶん深まった」「現場での作業が見られて楽しかった」となかなか好感触でした。

国有林からも本業である森林の管理経営について、定期的にサポーター等へ情報発信していく必要を感じた一日でした。



間伐の必要性について説明中



間近で見るプロセッサ

平成24年度 赤谷の日活動実績

年	月	日	参加者 計	活動内容									備考
				炭素関係	生物調査	環境整備	デモンストラ	センサ設置	湿地調査等	豊凶調査	イベント等	その他打合せ	
2012	4	7 8	25										芽吹き観察
2012	5	12 13	36										旧三国街道マップ素材集め
2012	6	2 3	33										鹿柵ネット張
2012	7	7 8	39										いきもの村自然観察 旧三国街道マップづくり情報収集
2012	8	4 5	38										溪流調査体験・南ヶ谷湿地ホテル鑑賞 いきもの村自然観察
2012	9	1 2	26										講義：人工管理を学ぶ
2012	10	6 7	21										いきもの村自然観察
2012	11	3 4	16										旧三国街道マップづくり情報収集 たくみの里赤谷ブースオープン
2012	12	1 2	26										いきもの村自然観察 落ち葉掻き・薪集め
2013	1	12 13 14	29										鳥類調査 輪かんじき作り スノーシュー修理
2013	2	2 3	20										赤谷の日改良意見交換会 アニマルトラッキング・輪かんじき作り
2013	3	2 3	13										アニマルトラッキング ムササビのムーちゃん大作戦
計			322	3	10	9	11	0	9	7	4	5	

2 平成24年度を振り返って（赤谷センター職員）

平成24年度は、前年度から1名減の3名体制でのスタートとなりました。一人足りない分は気力で補い、調査活動はもとより、環境教育に新たなプログラムの導入や「道の駅たくみの里」に広報ブースを設置するなど普及・啓発活動に力を入れました。



上席自然再生指導官

赤谷センター所長 廣橋 潤

24年4月1日、4名しかいないセンター職員の内、私を除く3名が新任地に向かって旅立っていきました。着任したのは2名、1人足りない・・・。

そんな不安で始まった平成24年度でしたが、溪流概況調査やエリア6の取り扱い方針の決定など、プロジェクトの推進に寄与できる活動をセンターが中心となって進めることができたと思います。少々無理がありましたが、充実した一年でした。



自然再生指導官

赤谷センター 石坂 忠

赤谷プロジェクトが始まった平成16年度から5年ほど在籍していましたが、昨年4月に戻ってきました。赤谷プロジェクトが始まった頃は、エリアに関する集落を対象とした説明会を開催したり、エリアの自然環境を知るための様々なモニタリング調査に参加するなど、初めて知るものや経験が出来ました。

久々の赤谷プロジェクトは、各ワーキング・グループで多種多様な活動が行われており、空いた空間を埋めるのが精一杯の一年でした。



自然再生指導官

赤谷センター 栗田 喜則

昨年4月に赴任し、猛禽類・ホンドテン調査など初めて経験する業務に戸惑いもありましたが、同僚・赤谷プロジェクト関係者の皆様のご指導や研修等を通じて、生物多様性の保全等について学ばせていただきました。

成果としては、環境教育と広報活動をメインにアイデアを出しながら、全国育樹祭など様々な場所での広報活動の実施。また、綾プロジェクト関係者との交流など、新たな取組も進めた一年でした。